

実践者が省察と対話を通して幼小連携・接続の意味を捉え直す研修の検討

— 社会的実践としての研修デザイン —

松田登紀

(奈良女子大学附属幼稚園・奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科博士後期課程大学院生)

柿元みはる

(奈良女子大学附属幼稚園)

長谷川かおり

(奈良教育大学附属幼稚園・奈良国立大学機構連携教育開発センター)

Consideration of Training for Practitioners to Reconsider the Meaning of Collaboration and Connection between ECEC Settings and Elementary Schools through Reflection and Dialogue: Training Design as Social Practice

Toki MATSUDA

(Kindergarten attached to Nara Women's University

Doctoral students of the Graduate School of Division of Humanities, Nara Women's University)

Miharu KAKIMOTO

(Kindergarten attached to Nara Women's University)

Kaori HASEGAWA

(Kindergarten attached to Nara University of Education

Center for Interprofessional Education Development, Nara National Institute of Higher Education and Research)

要旨：幼小連携・接続が政策課題になっている背景を踏まえた上で、幼小連携・接続を実施する当事者である実践者自身が幼小連携・接続実践の目的を見出し、その上で目的に合った手段を選択していけるよう、意識変容の学習が起こりうる研修を開発することを研究の目的とした。省察と対話を方法として研修をデザインし実施した結果、参加者が思考の枠組みを再構成し政策課題について当事者として取り組もうとする変容が起こったことが示唆された。加えて研修をデザイン・実施したメンバーにおいても、保育実践と相似形を為す思考が促され、研修が社会的実践として意味づいた。

キーワード：幼小連携・接続 collaboration and connection between ECEC Settings and Elementary schools

研修デザイン training design

省察 reflection

対話 dialogue

社会的実践 social practice

1. はじめに

本研究報告は、「令和5年度 連携教育開発センタープロジェクト研究」として実施した、研究テーマ「幼小9年間の子どもの絶え間ない育ちをみとり・支える—教育当事者としての実践者が対話を通して幼小連携・接続の意味を生成する研修の開発—」について行うものである。

1.1. 問題と目的

我が国の幼小連携・接続に関わる取り組みは、多忙な実践者にとって幼小連携・接続を実施すること自体が目的となってしまう¹、その意味を実践者自身が見出せないまま取り組むことにより負担感が増す現実を本研究では問題としている。この問題に対し、幼小連携・接続が「幼保小の架け橋プログラム」などの政策課題になっている背景を踏まえた上で、幼小連携・接続を実施する当事者

である実践者自身が幼小連携・接続実践の目的を見出し、その上で目的に合った手段を選択していけるよう、意識変容の学習が起こりうる研修を開発することを研究の目的とした。

2. 方法

2.1. 省察と対話という方法 ―＜事前シート＞＜おたずねシート＞＜ふりかえりシート＞

本研究で検討する研修の対象者の多くは幼児教育施設及び小学校における実践者であり対人関係専門職と呼ばれる。三輪（2023）²によればこの対人関係専門職の資質・能力にはハウツー的で個別具体的で評価のしやすい技能と、対人関係専門職の根底にある普遍的な課題の解決に向かうような教育観の錬磨や成長に向けた探究心があるという。そして現在実施されている多くの研修は前者に対応するものであり、後者に対応するものとしては検討課題となっていることを指摘している。またショーン（2007）³は、専門職教育においては問題の設定そのものに枠組みを与えていくことが大切であるが、自己の根底にある問題は何であるのかを自覚することは難しいことから、実践の中での省察の重要性について論を展開している。

本研修で目指すのはまさに、与えられた政策課題の解決の方法を伝授する研修ではなく、何が問題となっている自己の実践に政策課題がいかに関与しているのかを実践者自身が省察することによって見出していくことを目指すものである。そのために本研修では対話という方法を選択する。ここでいう対話はバフチンの提示するポリフォニックのアプローチであり、「差異」を伴う対話である⁴。幼児教育実践者と小学校教育実践者は時に、同じ言語を用いているとは思えないほど言葉が通じないと感じることがある。その違いについて、自分の価値観や考えが正しいことが前提で話すのではなく、一旦自分自身の価値観や考えについて省察した上で、「差異」について語り合うことにより新たな気づきや意味が生成される場として研修をデザインするのである。

そのため、本研修では対話を促す＜おたずねシート＞⁵を開発した。＜おたずねシート＞とは、研修参加者の当たり前（認識の固定化）を揺さぶるために、他者との対話を方法として研修に取り入れるための仕掛けである。研修参加者は＜事前シート＞において自己の認識を自覚した上で、＜おたずねシート＞により固定化している認識を揺さぶり、その上で「差異」について異質な他者と対話をする。幼児教育・小学校、どちらかが正しいわけではなく、どちらかに合わせるわけでもない、子どもにとっての幼小連携・接続を問い直していくために、今日の前の子ども達の姿から、価値観の異なる他者が一緒に新たな意味を見出し創造していく。シートの詳細については昨年度の研究報告（松田ほか,2023）⁶を参照されたい。

2.2. 社会的実践としての研修デザイン

本研修の開発・検討は、研修参加者自身が自分にとっての幼小連携・接続とは何かを見出し参画していくことを願うとともに、私たちプロジェクト研究メンバーの社会的実践でもある。私たちのように複数の組織を越境し協働して研修を企画・実施するという営みが社会的にどのような意味があるのか、そして園での子どもたちとの教育実践とどのような相似形を描くのか、そして研修において研修参加者と私たちプロジェクト研究メンバーとの協働により今後幼小連携・接続はどのような実践に変容していくのか、幾つもの思考を行き来し様々な人と対話をするにより私たちプロジェクト研究メンバー自身も省察し学び変容することを目指し、本研修の検討を行なった。

2.3. プロジェクト研究メンバー

本プロジェクト研究メンバー（以下「メンバー」）は以下の通りである。

柿元 みはる（奈良女子大学附属幼稚園）
 長谷川かおり（奈良教育大学附属幼稚園・
 奈良国立大学機構連携教育開発センター）
 丸尾 晶子（奈良教育大学附属幼稚園）
 山本 祐子（奈良教育大学附属幼稚園）
 鎌内 菜穂（奈良女子大学附属幼稚園）
 大谷 陽子（奈良教育大学附属小学校）
 阪本 一英（奈良女子大学附属小学校）
 竹村 謙司（奈良教育大学教育連携講座・
 奈良国立大学機構連携教育開発センター）
 北尾 悟（奈良女子大学附属中等教育学校・
 奈良国立大学機構連携教育開発センター）
 松田 登紀（奈良女子大学附属幼稚園）

2.4. 倫理的配慮

研修参加者に対し、研修の位置づけ及び研究について説明を行い、了解を得ている。

3. 研修の実際

3.1. 昨年度の課題と改善

昨年度実施研修の課題及び今年度の改善点を表1に示した。今年度実施したメンバー会議での検討により、昨年度課題はこれまでの研修のイメージに捉われた、ハウツー的な思考による課題であったことに気づき、課題の枠組みそのものを問い直すダブルループ学習⁷による改善が可能となった。

表1 昨年度実施研修の課題及び今年度の改善点

昨年度課題	改善点
＜おたずねシート＞	＜おたずねシート＞は一つの仕掛けである。このツールだけで

<p>弱さにより、省察に至りにくい参加者が見られた</p>	<p>省察が促されるわけではない。 →例示を修正するに留め、以下3点を改善する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育と学習を同日開催にし、両施設の子どもの学びの連続性と異同の両方を感じられるようにする ・研修開始時に、本研修は答えや方法を得る場所ではなく、参加者自身が幼小連携・接続の当事者であると自覚できるマインドセットへの転換を促す時間を設ける ・対話グループメンバーの異質性を高められるようにし、参加者の問い直しが起こりやすいようにする
<p>複数の学校で協働して運営する難しさ</p>	<p>なぜ難しさを感じるのか</p> <p>①方法論ではなく、何が重要かを同じテーブルで話し合う機会にできると良いのではないか</p> <p>→常に目的と手段を分けて考えるように意識する</p> <p>②担当事務局を研修ごとに設けることで事務仕事が煩雑になる</p> <p>→情報共有ドライブを作成する</p>

3.2. 実践としての研修デザイン構築

(1) コンセプト—社会的実践としての研修

実践者の、実践者のための、実践者による研修であり、全ての人々が当事者であり参画していくことを大切に。子どもとの保育実践と同様、正解はなく、不確実だからこそ場の状況との対話から判断し選択し、実践しながら学び続けることを意識した。

(2) 省察を促す仕掛け

○反省モードから安心モードへ

幼小連携・接続の話題になると、大抵の実践者は常に不全感を抱いている。それほどまでに実践者にとっては大きな課題である。そこでまず、幼小連携・接続の課題は自分だけの課題でも、自分の学校だけの課題でも、日本だけの課題でもなく、世界中で取り組まれている課題であること(OECD,2017)⁸を理解するレクチャーの時間をもつ。このことにより研修空間に仲間意識と安心感が生まれるようにし、自己と向き合いやすくする。

○研修の場の地平を共有する

講義伝達型の研修とは異なり、一人ひとりが当事者とし

て参画する研修マインドとなるべく、奈良女子大学附属幼稚園(2021)⁹における研修デザイン:「尊重」「異質な他者」「ネガティブケイパビリティ(もやもや)」「少人数での対話」「まとめない」「心理的安全性」「語り」「正解を見出さない」「自分はどうか自分を知る」の地平を共有する。

○<おたずねシート>による思考プロセスの促し

価値観や技能の異なる幼児教育実践者と小学校教育実践者の対話において、自分の正しさの地平から相手に質問をすることは時に批判的態度を生む。そこで先述のように、「なぜ自分はそう考えたのか」「違和感はなぜ起こるのか」について、<おたずねシート>に文字化することにより自己省察を促した後、実際の対話に移れるようにする。

○「書く」という行為

「書く」という行為は、自己の思いや考えについて一旦立ち止まり、もやもやしたまだ言葉にならないものの中から文字として抽出、編集し、文章として形作っていくことである。自らの身体を通じた行為である「書く」という時間を確保することにより、自己と向き合うことを促す。

(3) 差異による対話を生む仕掛け

○子どもの学びの姿からの対話

保育実践や学習を参観する際、実践者は技術的熟達者と省察的実践者の思考フレームで実践をみとる¹⁰。幼児教育実践者と小学校教育実践者、自治体での実践者や研究者など、日頃の経験を通して実践を参観するため、同じ場面を参観していてもそこでの捉えは必ず差異を生む。同じ場面を見ていることから生まれる差異を前提として、差異を語り合うことで自分を問い直すとともに見方・考え方を豊かにする。

○異質者で構成するグループ

これまで実践者の研修では、話し合う話題の土台が近い方が議論が深まると考えられてきた。確かに技術的熟達を目指す場合や情報交換を行う場合には相手の言葉が何を指すのかが即座に理解できる方がわかりやすい。一方で省察的実践を目指す場合は異質な他者との対話により、これまでの当たり前を問い直されることが多い。自分の当たり前を問われることで、無自覚な価値観に気づくことや実践の論理を言語化することで自覚することを促す。

3.3. 研修の実際

令和5年度研修は以下の日程で実施した。

<p>6月26日(月) 奈良女子大学附属幼稚園・小学校 参加者 44名(メンバー含む)</p>
<p>10月30日(月) 奈良教育大学附属幼稚園・小学校 参加者 55名(メンバー含む)</p>

研修日程 及び 内容 (6月26日分)	
9:00~	研修の趣旨説明
9:20~	保育参観
12:00~12:30	「D.D. (Daily Dialogue)」 保育実践の場に身を置いて感じ考えたことを語り聴き合う
13:40~	学習参観 3年月組 音楽
14:30~	<おたずねシート> 記入
15:00~17:00	グループ対話を含む協議会 ・研修の趣旨説明 ・授業者 自己紹介 ・小グループでの対話 ・対話内容の共有 ・公開保育者/授業者より一言 ・小グループでの対話 (研修をふりかえって) ・ふりかえりシート 記入

3.4. 参加者のシートに見る意識変容

研修前と研修後の記述(抜粋)を以下に示す(下線は筆者)。

参加者 Aさん	
事前シート	<p>これまでに経験した幼小に関わる活動は、子どもにとってどのような意味があったと考えますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園での姿や特性などを事前に共有することで、必要な配慮ができると思う <p>子どもにとって意味のある幼小連携・接続とは、どのようなものだとお考えですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就学前に小学校の生活を見られる機会や交流などから、子どもたちが期待を持って小学校に行けるようにすること ・保育者や教員が連携し合い、子どもの学びの連続性について共通認識をもって取り組めるような環境にすること
ふりかえりシート	<p>協議会を終えて、今率直に感じ考えること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段、「私ならこういう対応をするかな」と考えることはあるが、「じゃなぜそう感じたのか？なぜそう思ったのか？」と考えたのは初めてだった。視点を変えて自分に問いかけることで自分自身への理解に繋がったのではないかと感じる。 ・私は自分の意見を言葉にするのが苦手で、うまく対話することができていたかわからないが、<u>互いに認め合おう、理解し合おうという先生方の雰囲気がとても素敵だった。</u> <p>子どもの学びにつなぐために、今後自分が取り組みたいこと</p> <p>対話の共有で、学びの土台は仲間作りであった。保育をしていると、私自身が「みんな仲良く」と思いすぎてしまっていることがある。そうではなくて、1人で遊ぶのが好きな子どもも、</p>

<p>みんなで力を合わせる時には互いを認め合って繋がれるような、その中で十分に自分を出せるような雰囲気作りや関わりを模索したい。</p>
--

<事前シート>では政策のことで語られていた幼小連携・接続であったが、<ふりかえりシート>では研修での実感を自己の実践として転移させようとしており、意識変容の学習が起こっているといえよう。

参加者 Bさん	
事前シート	<p>これまでに経験した幼小に関わる活動は、子どもにとってどのような意味があったと考えますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(略)子ども達にとって、学校という場を知る良い機会になったと思います。小学校に行ったという経験から、入学の期待をもつことができたと思います。 <p>子どもにとって意味のある幼小連携・接続とは、どのようなものだとお考えですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の先生方に子供を知っていただくこと、<u>園での活動やねらい、大切にしていることを理解してもらうことが目的</u>
ふりかえりシート	<p>協議会を終えて、今率直に感じ考えること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(略)幼稚園・小学校一貫して、子ども一人ひとりを肯定的に認め、また見守る保育や教育の在り方が、学びや感性を育む支えになられているように感じました。 <p>子どもの学びにつなぐために、今後自分が取り組みたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループでの対話の中で「こ幼保と小学校の連続性と言われるが、卒園や入学の『節目』も子どもにとって大切では」という意見を聞いた時、それも成長につながる大切な過程になるのでは、と同感しました。 ・参観などでお互いを知り合い、どのような子ども達に育ってもらいたいかという教育の主になるものが、<u>小学校と共有できれば良いと考えますが、システム上ハードルが高いと率直に思います。</u> ・<u>思い切り園生活を楽しみ充実することで心と体を育み、小学校に期待をもって送り出していける保育を支えたいです。</u>

<事前シート>で考えている方法について、<ふりかえりシート>では揺らいでいることがわかる。目の前の方法についてなぜ自分は「ハードルが高い」と感じるのか、その中で今の自分にできることは何かを考えようとしている。

参加者 Cさん	
<p>これまでに経験した幼小に関わる活動は、子どもにとってどのような意味があったと考えますか？</p>	

事前シート	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校という環境を、友達と一緒に知ること期待感を持ったり、不安や緊張を和らげる。 ・年上児は憧れたり、大きくなったことを実感できたりする。(略) <p>子どもにとって意味のある幼小連携・接続とは、どのようなものだとお考えですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学時に子どもが少しでも困ったり戸惑ったりする場面が減ること。 ・幼児教育の中で、その子どもが興味や関心を持っている遊びが、一年生の学習で引き続き行えること
ふりかえりシート	<p>協議会を終えて、今率直に感じ考えること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職種や職場が違って、子ども理解のためにすべき行動や声掛け、そのタイミングなどは、保育者も教師も同じなんだということを見学させていただき強く感じました。 <p>子どもの学びにつなぐために、今後自分が取り組みたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの就学時まで、や、就学に向けて、と捉えずに、子どものもっと先を考えて子どもに関わっていきたいと思います。 ・環境のせいにせず、自分のできることを(例えば校区の小学校との参観交流など)考えて、発信できたらと思います。

研修前には幼小連携・接続における子どもを対象化し、課題解決として学校への適応に重きを置いていたが、研修後には子どもの存在自体を捉え、時間的に拡張して考えている。また幼小連携・接続の環境的な難しさは感じながらも、具体的な実践として自分に何ができるかについて向き合い、行為を変容させようとしている。

3.5. メンバーの意識変容—社会的実践としての研修とは—

下記は今年度の研修実施を終えてメンバーから出た言葉である。

公開研究会はこれまでもやったことがあった。でも研修会をデザインすることはなかった。どこを考えたのか、を考えさせられたな、と思ってる。保育だけ(実践する)じゃないし、(協議会)自分もいち参加者だし、幼小の意味や難しさも考えたし、価値観の違いも感じて、保育の中での幼小移行期ももう一回考えたし。それをみんなで考えるために何ができるか、をあまり今まで考えたことがなかった。という話のもって行き方をしたら、建設的な話し合いにするにはどうしたらいいんだろうとかも考えた。

これまでの附属学校園でなされてきた「公開保育」「公開学習」とはモデルとしての実践を情報伝達する、いわば講義伝達型の研修であった。しかし今回、研修の目的をメンバーで議論し研修をデザインしていくこととな

り、参加者の思考の枠組みを視点として考えることで、研修デザインも保育実践の環境構成と相似形として捉えていくように、メンバー自身にも意識変容がおこった。

実際に第2回研修会最中の昼食時、参加者の参観での姿を捉えたメンバー同士で研修デザインについての問い直しが起こり、研修会当日に研修の進め方を柔軟に変えていくということが起こった。保育実践時と同じように、メンバー一人ひとりが状況を捉え判断し、研修の目的に照らして研修という実践を変容させていったのである。この研修の目的と、目の前の参加者の姿を勘案して柔軟に変更していこうとするメンバーの姿はまさに、参加者ととも幼小連携・接続とは何か、新たな意味を生成しようとする社会的実践に他ならなかった。

(研修デザインも)方法としての転換(保育参加など)がないと、(参加者側も)いわゆる「公開保育」が抜けきれてない。デザイン側も(いわゆる「公開保育」のイメージが)残っている。幼小になると、「つながるところを探そう」になったら(方法論になってしまった)意味がない。

上記のメンバーの言葉からは、研修企画側として、参加者側として、当事者意識をもつからこそ昨年度とは異なる相での研修の課題が見える。研修の枠に課題テーマをはめるのではなく、保育実践と相似形を為す社会的実践として研修の枠組み(環境)ごとリデザインしようとしているのである。

4. おわりに

幼小連携・接続を実施する当事者である実践者自身が幼小連携・接続実践の目的を見出し、その上で目的にあった手段を選択していけるよう、意識変容の学習が起こりうる研修を開発することが本研究の目的であった。研修後の参加者の振り返りからは、自己の思考の枠組みを再構成することで政策課題を実践者が当事者として取り組もうとする変容が見られた。

私たち実践者が作業員ならば、指示された内容について行動することが仕事となるだろう。しかし私たち実践者も主体であり、主体である子どもとともに、そして仲間とともに well-being を大切に生きていきたいと願う。そのためには、私たちにとって幼小連携・接続とは何か、当事者としてともに考え実践していける場(研修)が必要である。研修とは課されるものではなく、私たちがよりよく生きていくための一つの社会的実践となり得るよう、実践者が学び続ける場として今後も仲間とともに考えていきたい。

謝辞

本研修を企画・運営するにあたり、指導助言いただき

ました奈良県教育委員会及び奈良市こども未来部の各先生方、保育及び学習公開をしてくださった各先生方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

引用文献

- 1 酒井朗・横井紘子（2011）保幼小連携の原理と実践：移行期の子どもへの支援，ミネルヴァ書房，pp.63-77.
- 2 三輪建二（2023）わかりやすい省察的实践，医学書院，pp.6-12.
- 3 ドナルド，A，ショーン（2007）省察的实践とは何か（柳沢昌一・三輪建二（監訳）），鳳書房，pp.40-41.
- 4 桑野隆（2021）生きることとしてのダイアローグ，岩波書店.
- 5 松田登紀・長谷川かおり・柿元みはる（2023）「幼小9年間の子どもの絶え間ない育ちをみとり・支える」，国立大学法人奈良国立大学機構 連携教育開発センター研究紀要，第1号，pp.83-87.
- 6 同上.
- 7 アーギリス，C（2007）「ダブル・ループ」学習とは何か（有賀裕子（訳）），DIAMONDハーバード・ビジネス・レビュー，4，pp.100-113.
- 8 OECD（2017）Starting Strong 2017.
https://read.oecd-ilibrary.org/education/starting-strong-2017_9789264276116-en#page1（アクセス2023/11/19）
- 9 奈良女子大学附属幼稚園（2021）幼児教育におけるカリキュラム・マネジメント .http://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/_research/2021kenkyugaiyou.pdf（アクセス2023/11/19）
- 10 前掲書2，pp.14-32.